

平成30年 5月24日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12869

研究課題名(和文) 中国現代文学における通俗小説 Xu Xu・Wumingshiを中心に

研究課題名(英文) Popular novels in the modern Chinese literature: A study of Xu Xu and Wumingshi

研究代表者

杉村 安幾子 (Sugimura, Akiko)

金沢大学・国際基幹教育院・准教授

研究者番号：50334793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本における従来の中国現代文学研究は、通俗文学を無視してきた。古典文学研究における通俗文学研究が、一定の量と高い水準を誇るのとは対照的である。本研究は中国現代文学史上、読者に圧倒的人気を誇り、刊行作品がベストセラーとなった「通俗作家」であるXu Xu(徐ク1908-1980)とWumingshi(無名氏1917-2002)に光を当て、彼らの小説を通じて、中国文学における「通俗性」および「非政治性」の検証を目的とした。その結果、社会主義中国が民衆を主役に据えながらも、民衆受けのするものを排してきた構造が析出され、徐ク・無名氏の活躍が主に1940年代であったことを受け、民衆と戦争の関係も考察した。

研究成果の概要(英文)：Sinology in Japan has consistently ignored the existence of modern popular novels despite the fact that the study of classical popular novels is outstanding in the quality and in the number. This study focused on Xu Xu (1908-80) and Wumingshi (1917-2002), who were overwhelmingly popular writers in 1940's. Although all their novels were at the top of the bestseller lists in those days, they were treated coldly by the Chinese literary world. This study examined the following two points: the "popular" factor and the "nonpolitical" factor in popular novels; the relationship between people and war in the modern Chinese literature.

研究分野：中国近現代文革

キーワード：無名氏(Wumingshi) 徐ク(Xu Xu) 通俗小説 戦争

1. 研究開始当初の背景

中国では古来、「雅」と「俗」はかなり明確に線を画しており、「俗」は「雅」の下位に位置づけられてきた。「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」(曹丕「典論・論文」)とあるように、文学それ自体の価値は高くとも、「小説」という語の「小」が取るに足りない、些少な存在を示すことにも表れている通り、文学の中にも歴然と上下概念が打ち出されてきたのである。しかしながら、中国古典文学の長い歴史の中でも、下位と見なされてきた小説研究の歴史は長く且つ深く、資料も豊富である。六朝の志怪小説や唐代伝奇、明清の小説に関する研究は、中国古典文学研究が小説の下位概念を覆していった過程を如実に示しているとも言える。

一方、中国現代文学の歴史(およそ 1911 年から 1977 年)に目を向ければ、中国が社会主義を標榜する過程とも相俟って、通俗文学研究は完全に主流である純文学の蔭に隠れている。アカデミズムの通俗文学に向けた下位概念意識は、古典文学における「俗」よりもはるかに強く、社会主義中国が民衆を主役に据えたのとは裏腹に、民衆の愛した作品の数々を完全に抹殺してきた。その理由は、社会主義アカデミズムが、「社会主義的意義の見られない作品は一流の文学ではない」という認識を明確に打ち出していたからである。ここには近現代中国における文学と政治の直接的な関係を見出せるだろう。

本研究では中国現代文学史上、読者に圧倒的人気を誇り、刊行作品が軒並みベストセラーとなったにも関わらず、「通俗作家」として文壇から冷遇され続けた存在として徐ク(Xu Xu, “ク”は偏が「言」、作りが「于」、1908-1980)と無名氏(Wumingshi, 1917-2002)の2人を取り上げたが、これは彼らの作品に当時の中国における民衆と文学・政治・戦争との関わりが描き出されていると考えたためである。

2. 研究の目的

本研究は徐クと無名氏の作品分析を通じて、中国文学における「通俗性」および「非政治性」の検証を目的とするものである。それによって、社会主義中国が民衆を主役に据えながらも、一貫して民衆受けのするものを排してきた社会構造・政治状況も析出できると考えた。

徐クと無名氏の作品が、既存の中国文壇やアカデミズムから冷遇・差別を受け続けたのは、彼らの作品が主に美男美女による恋愛譚であったことによる。実際には、伝統的な中国の家族の問題・戦争・民族意識・ジェンダーなど、恋愛以外にも重要な要素が盛り込まれており、様々な切り口による分析が可能なのであるが、主筋が恋物語であるために、「通俗(=非主流)」と切り捨てられてきた。本研究は彼らの小説を分析することで、恋愛譚という単純なジャンル意識や「雅俗」意識を

越えた新たな視座を提供することを目指した。社会主義を標榜し、新たな国民国家形成へと模索を始めていた中国の理想とするありようではなかった徐クと無名氏を、中国現代文学研究史上に新たに正確に位置付けることを狙った。

3. 研究の方法

本研究を進めるに当たっては以下の4つの手順を踏んだ。

(1) 作品・関連図書・文献の収集

研究の基礎作業として、研究の基盤素材となるべき文学雑誌・文学作品・関連資料及び文献の収集を行う。特に第一次資料の入手を目指す。

(2) データ整理・書誌作成

収集した作品・資料の整理。書誌作成を通じて、考察・分析の基盤を築く。

(3) 資料・文献の渉猟

収集した作品・資料の精読・分析を明確な着眼点を据えて行なう。その際、通俗性・時代性・政治性・地域性などを着眼点とし、徐クと無名氏の作品を類型化し、理論化を試みる。

(4) 成果発表

研究論文を執筆し発表する。又、研究成果を社会に還元する。

4. 研究成果

平成 27 年度

平成 27 年度は、本研究の基盤となる以下の4点を集中的に行なった。

(1) 資料の定型的・集中的収集:

徐クと無名氏に関連する資料および文献と中国通俗文学に関する研究論著を集中的に行なった。9月には、上海と無名氏が1980年以降、逝去するまでの後半生を過ごした台湾に出張し資料調査を行なった。具体的には中国の上海図書館および台湾の国立国家図書館で1940年代と1980年代の新聞を調査した。また、無名氏の小説の初版本を可能な限り収集した。

(2) データの整理・統括、資料集・書誌作成:

収集したデータや資料を統括して資料集の作成を行なっている。これはまだ完成形ではなく、最終年度における完成を目指している。完成後は、日本ではこれまで体系化されていなかった徐クと無名氏に関する重要な基礎資料となることは間違いない。

(3) 資料の精読・考察:

「通俗性」「政治性」「時代性と地域性」「アカデミズム」などを主眼に据えて徐クと無名氏の作品を精読した。無名氏に関しては、小説を発表順に通読し、徐クに関しては、現時点では最も網羅的である『徐ク文集』(上海三聯書店、2008年)全16巻中、小説巻8冊と戯劇巻1冊を通読し、プロットや物語の傾向などについて類別した上で読書記録をまとめた。次年度以降の研究発表に確実に

つながるものである。

(4) 成果発表・対外発信：

上記の作業・調査を受け、成果としては論文「無名氏『北極風情画』考 「通俗戦略」を超えて」(5・参照))を挙げることができる。これは無名氏のベストセラー小説『北極風情画』の作品論であるが、中国の伝統的な才子佳人小説の流れにあり、エキゾチズムとロマンチズム、死別による愛の昇華といったような通俗的な「営業戦略」を用いたと同時に、人間の精神の本質を描いたことで単なる時代を超えて読者の支持を得るに至った経緯を明らかにした。

また、2015年度金沢大学公開講座『各国シリーズ：文化・文学にみる恋愛』の主任講師を務め、第1回「悲劇で成就する中国式恋愛」において無名氏の『北極風情画』と『塔の中の女』を体系的に分析・紹介し、社会への還元を行なった。これまで無名氏が日本にほとんど紹介されてこなかったことを考えれば、本講座の意義は小さくない。

平成 28 年度

平成 28 年度は、本研究の中核となる研究を行なった。具体的には以下の4点である。

(1) 資料の体系的・集中的収集：平成 27 年度に引き続き、徐クと無名氏に関する資料および文献と中国通俗小説に関する研究論著・論文の収集を集中的に行なった。特に無名氏が影響を受けたと思われるノルウェーの作家クヌート・ハムスンに関する書籍・資料に関しては、興味深い作品や論文を収集できた。

(2) データの整理・統括、資料集・書誌作成：これまで日本においては、無名氏や徐クに関する研究の基盤ともなるべき体系的資料は存在していない。データをとりまとめて、資料集・書誌を作成した。これは最終年度に完成を目指している。

(3) 資料の精読・考察：平成 27 年度に引き続き、徐クと無名氏の作品の精読を行なった。その際、「通俗性」に主眼を置き、何故彼らの作品が当時爆発的な人気を得たのか、そして何故「通俗」と見なされたのかを考察した。その結果、「美男美女」による「悲恋」物語は、彼らの作品において重要な定型となっていることがわかった。通俗文学を支える要素について、引き続き文責・検討していく。

(4) 成果発表：上記の作業および調査を受け、以下の2点の論文をその成果とした。

「徐ク『鬼恋』試論 悲恋への序奏」(5・参照)第21号、査読無、平成29年3月、pp.99-119)、「徐クと朝吹登水子(研究ノート)」(5・参照)

は徐クの出世作である短編小説『鬼恋』の作品論である。1937年に発表され、徐クを一躍有名にしたこの作品は、ベースに中国の伝統的な人鬼恋故事(人間と幽鬼の恋物語)があり、その意味では中国文学の伝統を踏襲しているが、当時のモダン都市上海を舞台として西欧的な雰囲気醸成しており、それらの

舞台装置が悲恋物語を盛り上げている点を指摘した。においては、徐ク作品『風蕭蕭』と日本のフランス文学翻訳者であった朝吹登水子の『愛のむこう側』の呼応関係について、重要な指摘を行なった。徐クがフランス留学中、朝吹登水子に出会っていたことは、双方の経歴からも明らかであり、『愛のむこう側』には徐クをモデルとしたと思しき中国人青年が登場するが、一方で『風蕭蕭』にも朝吹登水子をモデルとした女性登場人物がいることを明らかにしたものである。日中両国の作家が、期せずしてお互いを作品中に描き込んだことは、日中文化交流史上、大きな意味があることと思われる。

また、『ドラゴン解剖学・竜の子孫の巻 中華文化スター列伝』(5・参照)に収録した「政治に翻弄される知識人たち 銭鍾書と楊絳」は、直接的には無名氏と徐クへの言及はないが、銭鍾書と楊絳は無名氏・徐クと完全に同時代の作家であるため、本研究で明らかになった時代性や社会状況を反映させることができたため、間接的には本研究の成果と言い得る。

平成 29 年度

本研究の最終年度として、論文を2点執筆した。1点目は「徐訐「春」試論——後景化されつつそこにある戦争」(5・参照)であり、これは申請者が研究分担者を務める学術研究助成基金助成金基盤研究(C)「日中戦争時期重慶における民族主義文壇と国民党系知識人の内陸都市間連携」(大阪教育大学中野知洋、平成29~31年 課題番号17K02642)における研究と密接に連携しつつ、徐クの重慶滞在経験が基盤となった短編小説「春」を、日本軍による「重慶爆撃」(1938年12月から1941年9月)をキーワードとして考察した作品論である。本作は一見、のどかで微笑ましい恋物語に見えるが、実は重慶爆撃を被った市民の悲痛な精神状態が根底にある点を指摘した。この指摘は、申請時点で本研究の「目的」として考えていた「民衆と戦争」との関係の一端を明らかにしており、中国本国の研究者が看過している徐ク重要な問題意識が基底にあるのは間違いない。

2点目は、公刊には至っていないが、作家無名氏の中編小説『塔裡的女人』の作品論を執筆中である。本作は無名氏の1940年代の代表作2作のうちの一つであり、中国現代文学研究における「通俗」の問題を考える上で重要な地位を占めている。申請者は徐クと無名氏の小説に共通する要素として「美男美女による悲恋、奇想天外な展開、異国情緒、庶民生活とはかけ離れた貴族的都市文化の4点を考えているが、それらが全て盛り込まれており、且つ刊行当時一大ベストセラーになったという意味でも、『塔裡的女人』を1940年代中国通俗小説の頂点とも考えている。2018年8月には本論文を基にした口頭発表を予定しており、収録された論文集は

2019年度に刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 杉村安幾子「徐訏「春」試論 後景化されつつそこにある戦争」、『言語文化論叢』(金沢大学国際基幹教育院外国語教育系紀要)第22号, 査読無, pp.79-100, 2018
2. 杉村安幾子「徐訏と朝吹登水子(研究ノート)」、『お茶の水女子大学中国文学会報』第36号, 査読有, pp.33-42, 2017
3. 杉村安幾子「徐訏『鬼恋』試論 悲恋への序奏」、『言語文化論叢』(金沢大学国際基幹教育院外国語教育系紀要)第21号, 査読無, pp.99-119, 2017
4. 杉村安幾子「無名氏『北極風情画』考 「通俗戦略」を超えて」、『野草』(中国文芸研究会機関誌)第96号, 査読有, pp.17-36, 2015

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

・『ドラゴン解剖学・竜の子孫の巻 中華文化スター列伝』中国モダニズム研究会著, 関西学院大学出版会著, 杉村安幾子, 第11章「政治に翻弄される知識人たち 銭鍾書と楊絳」pp.157-167, 2016

6. 研究組織

(1)研究代表者

杉村 安幾子 (SUGIMURA AKIKO)
金沢大学・国際基幹教育院・准教授
研究者番号: 50334793

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし